

2026年度
情報経営イノベーション専門職大学
入学者選抜試験 一般入試B日程

国 語

注 意 事 項

1. 試験時間は60分。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせること。
4. 解答用紙には解答欄以外に受験番号等の記入欄があるので、監督者の指示に従ってそれぞれ正しく記入すること。
5. 解答は、問題に対応した解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 問題冊子は持ち帰らないこと。
7. 試験終了まで退出しないこと。

—
次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

考えてみれば、我々は一生さまざまな場面で勉強を続ける。

学校での試験勉強、受験勉強、資格取得の勉強、昇進審査のための勉強、営業の勉強、話し方の勉強、マナーの勉強、料理の勉強、勉強法の勉強、間違った勉強法を見分ける勉強……などなど、勉強の対象は「勉強」という字がゲシユタルト崩壊するほど多岐にわたる。

(中略)

そもそも生物としては脆弱な人間がこれだけ栄えたのは、先人の知恵や知識を活用して自然に適応してきたからだ。人間にとって勉強は生き抜くための必須の活動だといえる。

しかし人間がこれだけ勉強漬けの生活を強いられているからこそ、勉強は嫌いだという人もまた多い。

だが、勉強嫌いの多くは、勉強が徒労に終わるから、勉強しても成果が出ないから勉強がつまらなくなったのではないだろうか。そして、勉強が苦痛になるのは勉強にまつわる「経営」に原因がある。

たとえば難しい英文を前にして、あるいは初めて出会う数式を前にして、いつまでもうんうんとうなっているような人がある。そのうち知恵熱を出して寝込んでしまったりする。

もちろん基礎的な知識が身についた後ならば、問題を解くための実践の場として思考をめぐらす時間も必要である。

だが、英語や数学の基礎知識を蓄積する目的においてはこの悩みの時間は無駄だ。知らないものはいくら悩んでも分かるようになるはずがない。それならば知識をいったん暗記して後から理解に努める方が、無駄に苦しまずにすむかもしれない（といっても、すぐ次を読んでいただければ分かる通り私は暗記至上主義者ではない）。

ところが今度はすべてを暗記するという別の苦行を始めてしまう人もいる。たとえば、英語が読めるようにならないからと単語を丸暗記しようとする。大量の単語を暗記したのに読めない英文に出会う。ちくしょう、とばかりに、もつともつと多くの単語を暗記しようとする。そのうち辞書を丸暗記しようとする。だが「abandon」に到達したあたりで分厚い紙の迫力の前について気合と根性も尽き果てる。

こうして「単語さえ覚えられれば……」と涙で辞書を濡らす。

よく考えてみれば、イギリス人やアメリカ人でさえ辞書に載っている単語の大部分を知らずに一生を終える。だから「単語を知らないから英語が読めない」わけではないはずだ。

歴史や法律などの一般に暗記科目と呼ばれるようなものでも、分厚い用語集をはじめから終わりまですべて暗記してしまおうとする人がある。

しかし用語集には無味乾燥な解説が並ぶ。こんなものを暗記できる人の方がどうかしている。根性で必死で食らいつく。本当に、文字通り、ヤギ顔負けに用語集を一ページずつ食べながら、メエメエ鳴きながら用語を覚えていく人もいる。

そうまでして暗記しても試験では点数が取れない。負けるか、とばかりにますます細かい用語を暗記するがいつまでたっても結果は出ない。こうして日本史・世界史用語集の前に「無条件降伏」する……。

哲学、社会学、経済学、経営学などの学問に興味を持った人も似たような状況におちいる。そうした人は、興味を持った学問の中で古典／定番とされている大著に最初から手を出す。SNS等で見かけた「○○学をやるなら、難しくとも最初から原著に当たれ」という専門家らしき人の至言に影響される（専門家も大抵は入門書しか読んでいないのは秘密だ）。

こうした人は、その大著を、真面目に、最初から最後まで一ページずつ理解しようとする。分からないところがあると立ち止まって何度でも読み返す。こうしていつこうにページをめくれない。そうこうしているうちにあまりに高尚すぎるとあきらめてしまう。

こうなってしまうと、どんな名著も「お洒落なカフェで読んで周囲に知性をアピールするアイテム」くらいにしか役立たなくなる（この場合「周囲からどう見えているのか」に神経が集中するあまり、ますます書籍の内容理解は進まないというおまけも付く）。

だが、大著が難解なのは著者自身も混乱しているからである。

なぜならば人間の思考は始まりも終わりもなく、行つては戻つてぐるぐる回っている「円環」だが、本は表紙と裏表紙が必ずある「直線」だからである。だから著書の最初に書いてあることが著書の終わりを知らないとい切理解できないことなどはざらにある。

そのため、何らかの学問を学びたいときも、入門書で全体観を把握してしまいか、難解な本は「とにかくページをめくってしまつて全体を理解してから二回目に精読する」方が理解しやすい。

勉強においてこうした徒労が起る理由は、知識の「つながり」と「ばらつき」から説明できる。

前提として、英語にかぎらずすべての知識は全体を部分に分けることができる。英語力の場合には単語力と文法力と長文読解力と……という具合である。しかし、部分的な能力の総和がそのまま全体的な能力になるわけではない。複数の部分がつながったときにはじめて全体になるためだ。

しかも、部分的な知識の理解度には、ばらつきが生じる。

そのため、部分的な知識のうち理解度が最も低いところが、確率論的に必ず一カ所（ごくまれに二カ所）存在する。そして、部分は別の部分とのつながりを持つため、上記の「最も低い所」が制約（ボトルネック）となつて全体の理解度を決定するのである。

たとえば、単語力がどんなに突出していても文法力が皆無ならば英語は読めるようにならない。あるいは、確率の概念を理解していないと統計学の結果を誤読してしまう。語彙力が乏しければ、鋭い感性があっても長文を書くことはできない。歴史の大きな流れが分かっているなければ史実の背景事情を説明できない。学問分野での議論の展開（学説史）が分かっているなければ理論の面白さは十分には理解できない。

このように、勉強においては「はじめに全体観を把握してから最も弱い部分を補強していく」必要がある。さらに、最も弱い部分を補強した後には別の部分が最も弱い部分となる。こうして次々に補強する部分を変化させることで全体の理解が進む。

勉強をめぐる経営の悲喜劇はこれだけにとどまらない。

たとえば簿記・会計を勉強している人で、ときどき会計基準制定の裏話まで体系立てて理解しているような人がいる。こうした人は、会計学の全体観を把握して部分的な知識をひとつひとつ埋めていって、体系的な知識を得ているのである。それにもかかわらず、こうした人が公認会計士試験、税理士試験、簿記一級に落ち続けて悩んでいることがある。

こうした悲劇は勉強の最終目的を設定し忘れていることから引き起こされる。

百メートル走で「よい、どん」の合図と同時にゴールとは反対方向に猛烈に走り去っていく人を想像してみよう。足は誰よりも速い。いったって真面目に、誰よりも素早く、ゴールから遠ざかっていく。

こうした場面で笑いださない観客はいないだろう。

しかし勉強においてはこれと同じことを平然とやってしまう。最終目的「ゴールを設定していない、またはゴールの設定が間違っているために、全力でゴールから遠ざかるのである。

たとえば何らかの試験に合格したのであれば「出題者の意図に沿う解答を時間内に書き上げる能力をつける」ことがゴールになるだろうし、○○学で論文を書きたいのであれば「○○学的想像力を身に着ける」あたりがゴールになるだろう。

ゴールを設定して全体観をもって勉強に取り組んでも、落とし穴はまだある。

大学受験の勉強のために毎日欠かさず机に向かっている真面目な人の姿を想像してみよう。その人は十分ほど英語を勉強した後には数学の勉強に取り掛かるようだ。そのために英語の参考書と単語帳と辞書を片付けて、数学の参考書と問題集を探し出す。

そうして机をがちゃがちゃ混ぜていると、思いがけず昔に紛失していたお気に入りのシャープペンが見つかる。「これ、探してたんだよ」とそのシャープペンで勉強を始める。しかしシャープペンの芯がなくなっているようだ。そこで次に芯を探し出す。

机の引き出しをひっくり返して芯を手にしたころには三十分がとうに過ぎている。さあ数学だ、と思ったとたん母親からの「ごはんよ」の声でまた中断である。こうして、「今日も勉強ばかりで疲れたな……」というわけだ。一歩引いてみている読者からすれば、この人物がこの日に

何ひとつ勉強していないことは明白だろう。

勉強であれ、仕事であれ、何事にも「本当に取り組んでいる時間」と「取り組むための準備の時間」がある。

人間は本当の取り組みの準備のために時間を浪費することがあまりにも多い。たとえば、勉強の計画を一日中立てている人がある。毎日のように、教師に、質問するでもなくひたすら勉強計画の相談にいく人がある。具体例を挙げればきりが無い。

そして「はあ、今日も勉強したなあ」「でも、成績が上がらないなあ」とため息をつくのである。

（岩尾俊兵『世界は経営でできている』による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。）

語注

• ゲシユタルト崩壊……まとまりのある構造から全体像が失われ、個々の構成部分にバラバラに切り離して認識されてしまう現象。

問一 傍線部①「勉強にまつわる『経営』」とあるが、「経営」とはどのようなものか。本文全体を踏まえて最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 勉強の方法や計画、時間配分などの戦略的なマネジメントを行うこと。

イ 勉強に対するモチベーションや意欲を維持する工夫をすること。

ウ 勉強時間の長さや勉強量の多さを他者に適切にアドバイスすること。

エ 自分の学力を把握し、勉強に必要な参考書や教材を購入・管理すること。

問二 傍線部②「イギリス人やアメリカ人でさえ辞書に載っている単語の大部分を知らずに一生を終える」と筆者が述べた意図として最も適当

なものを選び、記号で示せ。

ア 英語圏の人々の語彙力が低いことを批判するため。

イ 辞書の語彙数が過度に多いことを指摘するため。

ウ すべての単語を暗記することは無意味なことを伝えるため。

エ 日本人の英語学習意欲を高めるため。

問三 傍線部③「あまりに高尚すぎるとあきらめてしまう」とあるが、なぜあきらめてしまうのか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 著者の知識が不足しており、著者自身もよく分からないまま本を書いているため。

イ 人間の思考は円環的であることを理解せず、本を最初から直線的に読もうとしているため。

ウ 読むことを目的にするのではなく、周囲にアピールすることを目的に本を選んだため。

エ 専門的な用語が多用されていて、自分の知識では意味を理解することが困難なため。

問四 傍線部④「知識の『つながり』と『ばらつき』から説明できる」とあるが、どのようなことが説明できるのか。最も適当なものを選び、

記号で示せ。

- ア 勉強時間が不足することで全体の理解が進まないこと。
- イ 最も理解度が低い部分が全体の理解度を決定すること。
- ウ 複数の科目を並行して学習することで混乱が生じること。
- エ 各部分の理解度の合計が全体の理解度になること。

問五 傍線部⑤「簿記・会計を勉強している人」の例を挙げている理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 裏話的な知識を重視しすぎると、単語などの基本的な知識が不足して試験に落ちることを示すため。
- イ 知識がある人であっても落ちてしまう試験制度の問題点を指摘するため。
- ウ 体系的な知識がなければ試験に合格できないことを示すため。
- エ 試験勉強の最終目的を設定することの重要性を示すため。

問六 本文の内容に合致するものを記号で示せ。

- ア 人間は勉強によって自然に適応してきたため、いつのまにか勉強が好きになっていく。
- イ 英語学習に単語は必須であり、辞書に載っている単語をすべて覚えた人は感動の涙を流す。
- ウ 自分の設定したゴールがおかしいと気づいても、平然と進めてしまえるのが勉強である。
- エ 「本当に勉強に取り組んでいる時間」と「勉強に取り組むための準備の時間」は区別した方がよい。

二
次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

心の理論とは、「ある状況に置かれた他者の行動を見て、その考えを推測し、解釈する（推論する）」という心の動きです。

例えば^①2歳の子どもが、テレビを見ていると想像してみてください。親は、そのテレビ画面が見えない場所にいるとします。

その場合、親は当然、そのテレビにその瞬間に何が映っているかはわかりません。

しかし、幼い子どもは、実はそのことを理解できません。自分に見えているのだから、他の人にも見えていると思い込んでしまう。「他人の視点」を想像することができないのです。

これは誰もが通る道で、「他人の視点」がわかるようになるのはだいたい4歳くらい以降だといわれています。つまり、他者の視点や心の動きを推論するというのは、認知的な思考の中でも最も難しく高度なことだといえるのです。

この高度な認知的な思考を、目の前にいない人——例えば取引先や顧客にまで働かせること。これが、ビジネスにおいて「相手の立場で考える」ということです。

つまり、相手の立場で考えるのが苦手、という人は、この認知的な思考が苦手なためなのかもしれません。

ビジネスにおいては、例えば「報告」ひとつとっても、「相手の立場で考える」ことができているかどうかで、その方法も、内容も変わってきます。ここでは、大企業で働く20代後半のKさんの例で見てみましょう。

Kさんは、新卒としてその会社に入社して以来、「ホウレンソウ」の重要性を繰り返し教えられてきました。そこで、その部署に配属されて以来5年以上にわたって、何かを進める際には事前に直属の上司に当たるA部長に時間を取ってもらい、「こちらの確認をお願いします」と書類を渡して、これから進める仕事について、説明するようにしていたそうです。

その日も同様に、A部長に時間を取ってもらい、ひと通りの説明をしました。すると、A部長から返ってきたのは意外な言葉だったといいます。

「Kさんは、自分がラクになりたくて私に説明しているの？」

Kさんは確かに、「仕事にはハウレンソウが重要」「A部長も、進行を把握しておきたいはず」と考えていました。しかし、部長からの意外な言葉によって、心の奥底にある違う感情に気づかされたといいます。それは「責任を回避したい」という気持ちです。

つまり、A部長に報告しておくことで、何か問題が起こったときに、「A部長がOKと言ったから」と言える逃げ道をつくっておいたという。この逃げの姿勢を、A部長に見透かされてしまったわけです。

相手の立場を考えなければ、どれだけハウレンソウをしても、それは結局、自分のため、もっと言えば保身のためのものになってしまいます。

では、Kさんは、ハウレンソウをどのように行えばよかったのでしょうか。

最悪の選択肢は、

「ならば勝手に進めてしまつて、あとで報告すれば大丈夫だろう」

と安易に判断して、独断で進めてしまうパターンです。何については確認が必要で、何については自分の責任で進めていいのかという判断は、部下の立場で行えるものではありません。

では、どうするか。それは、責任回避のための言い方ではなく、忙しいA部長の立場を慮り、責任は自分で取る姿勢を示すことなのだと思います。具体的には、

「この仕事はこういう考えで進めたいと思いますが、よろしいでしょうか」
などの形です。

あるいは、仮に書類の誤字を指摘されたとしても、指摘されたところだけをささっと直して、

「確認してください」^②

と上司のところに持つていくのではなく、他にも誤字や修正の必要のあるところがないかを自分で見直してから、

「誤字を見直しましたので、最終チェックをお願いします」

と持つていったり、

「誤字以外にお気づきの点がないようでしたら、こちらで進めてよろしいですか？」と進めたりするような態度です。

上司という立場、あるいは先生と呼ばれる立場になると、周囲から「確認してください」と言われることが多くあります。しかし、それは本当にその人が確認しなければならないものなのでしょうか。もしかしたら確認を頼んだ本人が、自分ですべき判断を避けているのかもしれない。

上司や先生と呼ばれる立場ならば、「確認してください」と言われた際には、ときには厳しく、

「これは『確認してください』という内容のものではないよね」

と伝えることも必要です。こうして、互いには見えない心の内を擦り合わせていくことで、「相手の立場に立つ」ことに近づいていけるのではないのでしょうか。

ビジネスで頻繁に使われている「確認してください」という言葉は、非常に曖昧で、甘えのある言葉です。この言葉を使う場合には、「誰かに責任を押しつけることになっていないか」ということを、確認を頼む側も、頼まれる側も意識したほうがいいでしょう。

「相手の立場で考える」ことに関連の深い、「メタ認知」についても見ていきましょう。

「メタ認知」という言葉は、^②マインドフルネスなどの分野でも使われることも多いため、最近では聞いたことのある方も多いと思います。平易にいうと、「自分自身の意思決定を客観視すること」です。

ノーベル経済学賞を受賞したダニエル・カーネマンの著書『ファスト&スロー あなたの意思はどのように決まるか？』（ハヤカワ文庫）によると、私たちは意思決定の大半を「直感」で行っているといえます。

カーネマンは、この直感による意思決定を「ファスト思考」、別名「システム1」思考と呼び、時間をかけて熟慮する知的活動を「スロー思考」「システム2」思考と呼んでいます。そして私たちの意思決定は大半が実はシステム1思考に委ねられていること、そしてシステム1思考による意思決定は人間にとって効率がいいだけでなく、「おおむね正しい」ことが、本書では指摘されています。

システム1思考による意思決定は、「おおむね正しい」。それは、裏を返せば、ときに間違っていることがある、ということです。この間違いをシステム2思考によってチェックすること。これが「メタ認知を働かせる」ということです。

メタ認知の典型的なものが、「テストの見直し」です。多くの方は、いったん最後まで解き終わってもそれで終わりにせず、最初に戻って合っているかを振り返ると思います。

このときには、自分の考え方は合っているのか、出した答えは合っているのか、ケアレスミスはしていないかなどの確認を行っているはずで
す。システム1思考で下した判断を、客観的に見直しているというわけです。

ただ、時間に余裕があっても、テストの見直しができない子どももいます。

「見直しをしない！」

と親に何度も口うるさく言われても、なぜ見直さなければいけないのかわからない。

これは、そもそもメタ認知の力が養われていないといえるでしょう。あるいは過去の自分との付き合い方をまだ知らないといえるかもしれません。
せん。

親からすれば、「余った時間でテストを見直す」のは当たり前、何でもないことかもしれません。しかし、子ども、特に幼い子どもからすれば、「自分の思考の過程や、出した答えを振り返る」というのは、自然にできることではないのですね。

ビジネスにおいて、メタ認知をうまく働かせることのできない人は、自身がつくった資料などを見直すことや、指示通りに自分が動いている
かを見直すことが苦手です。そのため「配慮が足りない」「雑だ」などと評価されたり、非認知能力や性格の問題と片づけられたりしがちです。
しかし、やはり「メタ認知」もまた、非認知能力の問題でも、性格の問題でもありません。重要な認知の問題なのです。

（今井むつみ『何回説明しても伝わらない』はなぜ起こるのか？ 認知科学が教えるコミュニケーションの本質と解決策』による。

なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。）

語注

・マインドフルネス……過去や未来のできごとにとらわれず、現在に意識を集中し、ありのままを受け入れる心の状態のこと。

問一 傍線部①「2歳の子どもが、テレビを見ている」という例で、筆者が示そうとしている内容として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 幼い子どもの視覚的理解能力の限界。
- イ 親子のコミュニケーションの重要性。
- ウ 他者の視点を想像することの困難さ。
- エ テレビが子どもの発達に与える影響。

問二 傍線部②「確認してください」の説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア ビジネスにおける最も重要なコミュニケーション手段である。
- イ 曖昧で甘えのある言葉であり、責任を避ける働きを持つ。
- ウ 上司と部下の信頼関係を築くために必要な言葉である。
- エ 正確な情報伝達のために欠かせない表現である。

問三 傍線部③「ダニエル・カーネマン」の理論について、最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 人間は常に論理的な思考で意思決定を行っている。
- イ 意思決定の大半はスロー思考によって行われている。
- ウ 直感による意思決定は人間にとって効率がよく、おおむね正しい。
- エ 熟慮による意思決定の方が常に直感より優れている。

問四 相手の立場で考えることとメタ認知との関係について説明したものとして最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア メタ認知は相手の立場で考えることよりも高度な、複数の情報を統合する主観的な能力であるため、メタ認知ができる人は必然的に相手の立場で考えることもできる。

イ メタ認知は相手の立場で考えることの前提となる能力であり、メタ認知ができるようになってはじめて、相手の立場になって考えることができるようになる。

ウ 相手の立場で考えることは生まれつきの才能であるため成長させることは難しいが、メタ認知は後天的に習得される技術であるため、両者の性質は根本的に異なる。

エ 相手の立場で考えることは他者に向けられた認知的思考であり、メタ認知は自分自身の意思決定を客観視する認知的思考であって両者とも客観的な視点を必要とする認知能力である。

問五 本文の構成として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 概念の定義 ↓ 基本例の説明 ↓ 実践場面の分析 ↓ 関連概念の展開

イ 理論の提示 ↓ 実践場面の分析 ↓ 問題点の指摘 ↓ 解決策の提示

ウ 問題点の指摘 ↓ 原因の分析 ↓ 対策の検討 ↓ 効果の検証

エ 基本例の説明 ↓ 実践場面の分析 ↓ 理論の提示 ↓ 問題点の指摘

問六 本文の内容を踏まえた記述として適当でないものを選び、記号で示せ。

ア 他者の視点を想像することは認知的思考の中でも最も難しく高度なことである。

イ 相手の立場を考えないハウレンソウは結局自分の保身のためのものになる。

ウ システム1思考による意思決定は常に間違っているため避けるべきである。

エ メタ認知は非認知能力や性格の問題ではなく重要な認知の問題である。

三

次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、以下の各問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

さて、^①短期的に見たときに、技術革新で損する人と得する人のどちらが多いのかを考えてみたいです。

例えば、日本で労働者の多くが工場です仕事しているとします。あまり現実的な仮定ではないかもしれませんが、高度経済成長期は製造業が中心だったので、そういう時代もあったのです。そういう時代にロボットが発明され、工場から人がいなくなってロボットに置き換わりました。そのような場合は、損をする人のほうが多いと言えます。

しかし、多くの会社が人手不足で困っているようなケースを考えてみてください。世の中にはきつい仕事もあって、そういう業種では人手が足りなくて困っています。そういうところで技術革新が起きて、高性能なロボットが人間よりもはるかに効率的かつ安く仕事をするようになれば、損する人よりも得をする人のほうが多いはずですよ。

つまり、技術革新が日本社会に与える短期的な影響を、「得をするか損をするか」という二者択一で問いかけるのはかなり意地悪な質問なので、どちらが多いかは一概に言えないということです。もちろん、長期的には日本社会は得をするだろうということはわかるけれども、仕事を失う人たちが出てくることは間違いありません。したがって、圧倒的多数の人が仕事を失うのであれば、そういう技術革新は短期的にはあまり望ましくないわけです。しかし、人手不足に陥っているような仕事では、技術革新によって代替される人はそれほど出てきません。むしろ補完的な関係にある人のほうが多いので、技術革新は日本社会によい方向を与えることになります。

さらに重要なことは、どのような技術が開発されるかということです。^②AIやロボットが得意なのは定型的な仕事です。例えば、データからの予測が重要な仕事は人間から機械に大幅に置き換えられると考えられます。つまり、代替的だということになります。例えば、AIを使った病気の画像診断技術はかなり発達しています。

しかし、AIやロボットにも不得意な仕事もあります。例えば、役割が体系化されておらず、多種多様な状況に対応する必要がある、あらかじめ用意されたマニュアルではなく自分自身で適切なことを判断するような「非定型的」な仕事です。また、抽象的な概念を創出したり、方向性や解を提示したりするような「創造的」な仕事です。さらに、説得や交渉などコミュニケーションや他者との協力を必要とする「社会性」の高い仕事です。

さてここで、少し視点を変えて、「代替性」^③と「補完性」という観点から、人間の仕事が機械に置き換えられるかどうかを考えてみたいと思います。

まず、「代替性」という点で考えます。モノをつくる、サービスを提供するという仕事をするとき、機械が人間と同じ仕事をしているのであれば、人間と機械には代替性があることになります。しかし、代替性があっても、人間が機械にすべて代替されるわけではなく、どちらがより安くモノやサービスを提供できるかが大切になります。

次に、「補完性」という点で考えます。モノをつくったり、サービスを提供したりするためには、機械と人間の両方が必要であれば、両者は補完性があると言えます。例えば、自動車と運転手の関係で、機械の性能がよくなって安くなれば、それだけ人間も必要になります。

以上のように考えると、人間の仕事が機械に置き換えられて人間の仕事が減ったかどうかは、特定の仕事を指すのであれば「YES」であり、人間の仕事全体について言うのであれば「NO」ということになります。

つまり、人間がしていたよりも安く機械でできるようになるのであれば、人間がしていたその仕事は機械で代替されることになります。また、機械への代替が進んで、人手が余ることになれば賃金は低下します。そして、賃金が低下すれば、機械に頼っているより人間にさせたほうがいい仕事も発生することになります。

そもそも、コストということを考えた場合、機械は人間よりもすべての能力で上回っていると言えるのでしょうか。例えば、コンピューターは、記憶力や計算能力では人間をはるかに凌駕りようがしていますが、アイデアを考えたり、人とコミュニケーションしたりする能力は、人間よりも優れているとは言えません。また、モノを配達するサービスをすべてロボットに代替することはできないし、掃除ロボットが発達しても、部屋の片づけまでできるわけではありません。

以上をまとめると、ITやロボットが発達して起こったことは、ITやロボットが得意な仕事は人間からITやロボットに代替されてしまったということです。例えば、経理の計算や鉄道の改札などの仕事です。今、鉄道の改札と言ったのですが、高校生の皆さんは、鉄道の改札と言えば自動改札機しか知らないと思います。日本に初めて自動改札機が設置されたのは、1967年で大阪大学の吹田キャンパスの近くの北千里きたせんりという駅でした。その後、本格的に普及したのは1990年代後半からです。それまでは、人が切符に専用はきぎの鋏で印を入れてチェックしていました。

しかし、ITやロボットが苦手な仕事もあります。例えば、ビジネスのアイデアを考えたり、分析したりする仕事です。また、配送や接客など手作業が必要なサービスです。そのような分野の仕事は、ITやロボットと人間が補完的な関係にあるということになります。豊富なデータ

をもとに予測するのはAIが得意とする分野ですが、限られた情報しかない場合に、適切な予測をする能力やAIが出してきたデータをもとに意思決定をする能力は、人間のほうが優れている場合が多いと言えます。さらに言えば、ビジネスでの意思決定の多くは、AIとは補完的な能力が求められます。

第2章で議論したように、人間にはさまざまなバイアスがあります。そうしたバイアスで、間違った意思決定をしてしまうこともあります。AIやロボットなら、そのような間違いをすることがないので、人間が間違いやすいことは代替させたほうがよいことになります。あるいは、人間が間違いやすいことをAIやロボットに補完してもらうことで、私たちの意思決定はよりよくなるとも言えます。代替や補完という考え方は、行動経済学でもとても重要なもののなのです。

ところが、2022年11月に公開されたChatGPTや2023年2月に公開されたBing AI（ビングエーアイ）などの生成AIによって状況は大きく変わりました。それまでAIには不得意と考えられていたことを、生成AIはかなりできるようになったからです。

すでに人間の話し相手までできるようになっていて、例えば、これまでは人間と機械が補完的だった学習塾なども生成AIに代替してしまうかもしれません。生徒がわからないようなところを生成AIに聞けばすぐに答えてくれるし、テストでなかなか解けないような問題でも生成AIはわかりやすく教えてくれるようになるからです。つまり、塾の先生は人間でなければできないと思われていたけれども、ひょっとすると生成AIのほうが上手に教えてくれる時代が来るかもしれないということです。

実は、ChatGPTなどの生成AIがどのような人の能力を最も引き上げるのかということについての最新の研究があります。それによれば、ソフトウェア企業のカスタマーサポート（顧客からの相談窓口）部門にChatGPTを導入して、故障や不具合などの相談内容をChatGPTに聞くようにした結果、生産性が平均14%上昇したということです。カスタマーサポート部門で働く人は必ずしもソフトウェアの専門家というわけではなく、どちらかと言えば新人やスキルの低い人だったのですが、生成AIの導入によってその人たちの生産性が上がったということになります。

この研究からわかることは、生成AIが私たちの仕事にかなり大きな影響を与える可能性があるということです。新人がベテランと同じようなところまで生産性が上がるのであれば、ベテランの意味がなくなります。そして、生産性という点で考えると、新人は生成AIと補完的な関係になるけれども、ベテランにとっては代替的な関係になるということになります。

また、専門的な記事を書く記者にChatGPTを提供して影響を調査すると、低スキルの人ほど生産性が高くなるという結果も出ています。ベテランの記者は新人記者よりもはるかに上手な記事が書けるという意味で価値が高かったのですが、ChatGPTを使うことによって、新

人でもベテラン記者と同じような水準の記事を書けるようになるために、ベテラン記者の価値が大幅に低下するわけです。

以上の事実は、生成AIを使うことによって、低スキルの人ほど生産性が大きく上昇することを物語っています。つまりは、AIがスキルそのものの価値を低下させるということです。

技術革新のスピードは速く、少し前までなら機械では不可能だった仕事も、どんどん機械でできるようになっています。その一方で、人間にしかできない仕事も生み出され続けていきます。また、生成AIの出現によって、今までの技術革新とかなり大きな違いが出てくると言われています。今後、どのような技術が生まれてくるのかわかりませんが、その時代に苦手と思われていた技術分野に、それを克服するような新しい技術が生まれてくる可能性はかなり大きいと思います。

したがって、それにいつでも対応できるような能力を身につけておくことが大事なのです。私たちは、とりわけ皆さんのように若い世代は、他人や機械に代替されないような技能を身につけるために、常に学習を^Bし続ける必要があるということを肝に銘じて欲しいと思います。

（大竹文雄『いますぐできる実践行動経済学―ナッジを使ってよりよい意思決定を実現』による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。）

【文章Ⅱ】

「直観」というと、ちょっと理解しにくいかもしれませんが。具体例を出して、説明していきましょう。

あるテレビ番組で、讃岐うどんを作る達人を取り上げていました。うどんの材料は、「小麦粉、塩、水」だけです。コシはこの材料の配合の仕方と、足で生地を踏む力加減や時間で変わります。毎日同じ味とコシのうどんを作るためには、毎日同じ配合で、同じ力加減で生地を作ればよいのでしょうか？ 実は違うのです。毎日、気温や湿度は違います。それなのに、毎日同じことをすると、出来上がるうどんの味やコシは違ってしまいますのです。このうどん作りの達人は、「その日の気温や湿度によって、塩と水の分量を毎日微妙に変える」と言っていました。生地を踏む力加減も調節するそうです。それらの加減を決めるのは、直観だけが頼りです。

こうした直観を得るのは、たやすいことはありません。

しかしみなさんの中にも、自分が夢中になっている分野において、自ら工夫し微調整をしながら進めていることがあります。それは、バスケットボールでのシュートや、ピアノを弾く際のタッチの加減かもしれません。ゲームをクリアする際に「こっちに行ったらヤバイ」と感じることもそうかもしれません。ある技術に対して何らかの直観を得るには、長い時間が必要です。

これは、勉強も同じです。数式を解いていて「なんか違うかも……」と感じるとしたら、だんだんと数学的な直観が磨かれてきたのかもしれませんが。この直観こそ、中学・高校で数学を学習していくために欠かせない要素だといえます。また英文を書いて、「しつくりこない」と感じるのも同じです。

私たちは一生を通じて、多くのことを学びながら、同時に直観を磨いているのです。

ChatGPTは、このような直観的な思考はできません。そして、想像力もありません。ChatGPTにできるのは、集積された知識の要約や整理です。ネット上にある大量の情報を集め、次に来そうな単語を確率的に計算してもっともらしく自然に見える文章を作ることには得意です。しかし、本当の意味で新しい知識を創造することはできないのです。

それが人間とAIの違いです。

先ほどのうどん作りの達人のことをもう一度考えてみましょう。

うどんの味とコシは気温と湿度によるとわかっているとします。毎日達人がうどんを作るときの気温と湿度の値を入力し、そのときの塩と水の量を測定します。足踏みの回数や踏む強さも、機械で測定できるでしょう。これらの値をすべて入力してAIに与えれば、AIは「気温と湿度が〇〇のときには、水と塩はそれぞれ何グラムで足踏みはこの強さで何回」ということを学習し、教えてくれるはずですが。そしてそのとおり

にうどんを作る機械もできるでしょう。その機械が作ったうどんは、達人のうどんにかなり似ていて、おいしいと思います。

でも、達人とまったく同じものができるとは。できないと思います。

達人は、気温と湿度以外の要因を「直観的に感じ取り」、無意識に調整しているはず。それを口で説明することは、なかなかできません。その直観的な「感覚」こそが、人間独自の熟練の技や創造性の源なのです。それを完璧にAIに移植することはできないはずです。

人間は学びの過程で、考え、間違え、それを自ら修正することで、技を身につけると同時に、直観を磨きます。この直観こそが、この先みなさんが学ぶうえで非常に大切なものです。

もし無自覚のまま、考えることを放棄して生成AIを活用すれば、みなさんの知性に大きなダメージを及ぼしかねません。なぜなら私たちの学びにとって必要不可欠な「意味」を見つけ、「直観」を育む機会がその分だけ減ってしまうからです。うどんの達人が、うどんをこねる機械を使いたしたら、自ら微調整をしながらうどんをこねることはできなくなってしまいます。

小さいころから生成AIに頼り、生成AIに「答えを教えてもらう」ことに慣れてしまうと、本来人間が持っていた「意味の理解」が失われ、「直観」を働かせて新しい知識を創造していくことができなくなる。私はそのことを懸念しています。

（今井むつみ『AIにはない「思考力」の身につけ方 ことはの学びはなぜ大切なのか?』による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。）

問一 傍線部①「短期的に見たときに、技術革新で損する人と得する人のどちらが多いのかを考えてみたいです」とあるが、この結論と

して最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 技術革新は常に得をする人のほうが多く、社会全体に恩恵をもたらすものである。
- イ 労働者の多くが工場で働く時代では、技術革新によってほぼ全ての人が得をする。
- ウ 日本社会が得をすることが確実視されるため、得をする人が多くなるといえる。
- エ 技術革新による影響は業種や時代背景によって異なるため、一概には判断できない。

問二 傍線部②「AIやロボット」とあるが、AIやロボットの「得意な仕事」と「不得意な仕事」について最も適当なものを選び、記号で示

せ。

- ア 得意な仕事は画像を分析する仕事で、不得意な仕事は部屋の片づけのような仕事である。
- イ 得意な仕事は臨機応変に対応する仕事で、不得意な仕事は配送や接客などの仕事である。
- ウ 得意な仕事はデータを読み取る仕事で、不得意な仕事は経理の計算といった専門的な仕事である。
- エ 得意な仕事は説得や交渉などの仕事で、不得意な仕事は芸術的創造性を要する仕事である。

問三 傍線部③「『代替性』と『補完性』」に関する筆者の説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 代替性がある場合、機械が人間より安ければすぐに必ず人間の仕事は機械に置き換わる。
- イ 補完性がある場合、機械の性能が向上し安くなると人間の需要も同時に増加する。
- ウ 代替性と補完性は相反する概念であり、同時に成り立つことはない。
- エ 機械はコストがかからないため、技術の発展により補完性は将来なくなってしまう。

問四 傍線部④「ソフトウェア企業のカスタマーサポート」での生成AI導入研究について最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 生成AIは専門知識を持つベテランの生産性を大幅に向上させた。
- イ 生成AIは新人とベテランの生産性格差を縮小させる効果があった。
- ウ 生成AIは人間の仕事を完全に代替し、人員削減につながった。
- エ 生成AIは複雑な相談内容には対応できず、効果は限定的だった。

問五 【文章Ⅰ】二重傍線部A「限られた情報しかない場合に、適切な予測をする能力」と【文章Ⅱ】二重傍線部「直観」の関係について最も

適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 両者とも論理的分析に基づく能力であり、訓練によって習得可能である。
- イ 両者ともAIには困難な能力であり、定型化できない状況での判断力を表している。
- ウ 前者はデータ処理能力、後者は感覚的な判断力を指している。
- エ 前者は短期間で習得でき、後者は長期間の修練が必要である。

問六 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を踏まえ、【文章Ⅰ】二重傍線部B「常に学習をし続ける必要がある」と述べた背景として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 技術革新が予測困難な速さで進展するため、機械に代替されない人間特有の思考力や創造性を磨き続ける必要があるから。
- イ 生成AIによって低スキルの人の生産性が向上するため、高スキルの人は新しいスキルを習得し続ける必要があるから。
- ウ 技術革新によって新しい仕事が生まれ続けるため、変化する労働市場に適応できる知識を身につけ続ける必要があるから。
- エ 直観や創造性などの人間固有の能力は絶対に機械に代替されないため、これらの能力を伸ばし続ける必要があるから。

